

【論文】

ラフカディオ・ハーン「守られた約束」について

——原話と再話の比較から見えるもの——

川澄亜岐子

一. テキストについて

「守られた約束」(“Of a Promise Kept”)は、1901年に刊行されたラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の著作集『日本雑記』(*A Japanese Miscellany*)に収められている再話作品である。原話となったのは「菊花の約」という物語で、上田秋成『雨月物語』(安永5年刊)に所載されている。ただし、ハーンが自分で原話を読んだ可能性は低く、日本人の家族や知人を通してこの物語を知ったと思われるⁱ。

『雨月物語』は中国などの物語を原拠とする翻案小説9編から成り、今日につながる怪談文学の嚆矢的作品と位置付けられてきたⁱⁱ。その怪奇は超自然的な出来事を扱う単純な怪異にとどまらず、現実生活に対する秋成の屈折した思いがその背景として見出されてきた。高田衛は、秋成の翻案の手法を日本古典の伝統と中国文学の伝統との縊り合させた中に「自己の説話と文章」を織り込んだものと捉え、この方法によって「言葉の自立的世界としての文学性」が担保されていると述べる。その上で、ここに収められた物語は「封建社会のさまざまな社会現実や、人の世の日常性の卑小や醜悪や不幸のみじめさ、そうしたものへの作者自身のはけ口のない憤りや焦燥などの反発力」によって支えられているとの見方を示すⁱⁱⁱ。

作品の深層に現実社会に向けられた作者の批判的意識を読みとる解釈は、ハーンの「守られた約束」についての論考にも受け入れられてきた。田代三千穂は生育環境がハーンと秋成の性格に与えた影響に注目し、二人には共通する気質が見られるとしたうえで、ハーンの潔癖な性格とそれゆえの社会に対する幻滅が、秋成の類似する側面に共鳴して「守られた約束」に結晶したという見方を示す^{iv}。この立場は宮嶋夏樹にも共有される。宮嶋はさらに踏み込んで、田代が社会への幻滅と大きく捉えた点を、ハーンの近代日本社会に対する反発に限定する。

欧米の文化殊にキリスト教の影響が、「旧日本」の美しい徳の一つであつた信義の念を、現代の人びとの心から奪ひ去っていくといふ嘆きが、「約束」[「守られた約束」]といふ作品の底を流れてゐるのだと思ふ。さうして、周囲の俗物を嫌ひ、その意味で孤独な彼の心が、俗界を離れた境地に自適の生活を求めたいと願ふやうになるのも自然のなりゆきであらう。^v

明治維新以来、日本は近代化の名の下に猛烈な勢いで西洋化を推し進めた。だが、その一方で失われるものもあり、ハーンがそれらに心を寄せて著書に繰り返し書き留めたことは周知の通りである。上の引用では「信義の念」が前近代的な精神として挙げられ、それが近代化に伴って失われることへの懸念が「守られた約束」に通底する主題であることが説かれている。

田代と宮嶋の研究は、ともにハーンと秋成の伝記的な共通点や類似性から作品を読み解いてきた。その結果、二つの作品はともに書き手が抱える現実社会への鬱憤が反転し、昇華したものという点で一致することが説かれてきた。その一方、作品の中核に関わるような議論は深められていない。それぞれの作品の文体や、場面の構成、その特徴などについて部分的に言及されることがあっても、作品全体を見渡すような議論はほとんど進んでいないといえる。その理由の一つとして、再話とは原話を書き直したものであるという認識に求めることができる^{vi}。「守られた約束」においても、原話の主題を引き継いでいることが自明視されているように思われる。しかしながら、原話で頻繁に繰り返される「信義」や「まこと」といった言葉は、再話には訳出されておらず、またこれらの語が多用される場面の多くは省略されている。

本稿では、「信義」がどのように扱われているのかという点から秋成とハーンの商品を読んでみたい。原話において「信義」が形成される過程を辿り、それがどのような概念として示されるのかということを検討したうえで、それがハーンの再話ではどのように書き換えられているかという問題を考える。これらの作業を通して、ハーンが秋成の原話に何を読みとったのかということについても考察する。

二. 「菊花の約」——「信義」の過程

「菊花の約」は、序文、本編、結びという三つの部分から成る。ハーンが再話したのはその本編の部分で、次のような話である。

播磨の国加古の駅に丈部左門という博士がいた。ある時、彼は知人の家で病気の武士と出会う。武士は赤穴宗右衛門という松江出身の武士で近江に滞在していたが、故郷の富田城が襲撃され、主君が討死にしたとの知らせを聞いて故郷に戻る途中だという。左門は献身的に武士を看病し、二人は友人同士となった。そして宗右衛門の病が癒えると、二人は義兄弟の契りを交わし、左門は宗右衛門を自宅に滞在させた。

初夏、宗右衛門は旅を再開することを決め、左門とその母に別れの挨拶をする。この時、左門からいつ帰って来るのか決めてほしいと請われたので、宗右衛門は9月9日に再会することを約束して出発する。

約束当日、左門は朝早くから宗右衛門を迎える準備を整えるが、彼が帰ってきたのはすっかり夜が

更けてからだった。家に通された宗右衛門は、物思いに沈んだ様子で食事にも手を付けない。左門が訝ると宗右衛門はようやく口を開き、自分はおもはやこの世の者ではないと言って旅の一部始終を次のように語った。宗右衛門は松江に着くと従弟の赤穴丹治を訪ね、彼の勧めで尼子経久に会見した。その帰り道、宗右衛門は経久の命令を受けた丹治によって、彼の自宅に監禁されてしまう。なすすべもないまま約束当日となり、宗右衛門は悩んだ末に、「魂よく一日に千里をもゆく」という諺を思い出して自害した。そして、左門との約束を果たすべく、幽霊となって会いに来たという。語り終えると、宗右衛門は消えてしまった。残された左門は大声で泣き、その声を聞いて起きてきた母親とともに、その夜は泣き明かす。

翌朝、左門は改まって母親に挨拶し、出雲に向かう。そして松江に着くと、左門は真っ先に丹治の家を訪ね、彼の宗右衛門に対する仕打ちを厳しく非難する。そして家族の目の前で彼に斬りつけると、騒ぎに紛れて逃げ出した。だが、この知らせを聞いた経久は、あえて家臣に左門の跡を追わせなかった。

この作品において、「信義」はどのように描かれているのだろうか。ここでいう「信義」とは、「まこと」、「実」、「情」などとともにこの作品における重要な概念で、左門と宗右衛門のそれぞれの人柄や、二人の関係を表す語としても重要である。

まず、左門の「信義」について確認する。本編の冒頭には、「播磨の国加古の駅うまやに丈部左門はせべもんといふ博士はかせあり清貧せいひんをあまな憩ひて。友とする書ふみの外はすべて調度の祭てうど煩わづらはしきを厭いとふ」とあり、左門が質素ながらも高尚で、潔癖な人物として設定されている^{vii}。また、病床の宗右衛門を紹介された際は、彼に同情し、「士し憂うれへ給ふことなかれ。必救すくひまいらすへし」と声をかけて手ずから薬を処方したり、病人に粥を与えたりして、その様子は「病みを看ること同胞ほらからのごとく。まことに捨かたきありさまなり」といわれる^{viii}。左門にとっての「まこと」とは、困っている者がいればすかさず手を差し伸べ、親身になって接する態度であるといえよう。だがこれは、ひとえに彼の性格によるとはいい切れない。江戸時代、儒者には医学の心得があることも多かったことを踏まえれば、左門の思いやり深い態度は儒者としての意識の表われであるといえる。彼は儒者としての自己を強く意識しており、その役割を全うしようという気持ちを持っている。このように考えると、左門の「まこと」には儒者という社会的立場が影響しているといえる。

次に、宗右衛門の「信義」に移る。秋成の原話において、宗右衛門の人柄は左門を通して報告されることが多く、左門の場合のように語り手の判断が直接示されることは少ない。左門が宗右衛門に対して初めて「信まこと」という言葉を使うのは、二人が義兄弟となり、宗右衛門が左門の母に挨拶したいと言った時である。左門は宗右衛門の申し出を「信まことある言ことば」と受け取って喜ぶが、この判断に至るには、宗右衛門が信頼に足る人物であるという左門の確信が不可欠である。では、左門が宗右衛門の信義を確信するようになった根拠はどこに求めることができるだろうか。

左門が最初に宗右衛門の信義に触れたのは、宗右衛門が病床で語った身の上話であると考えられる。宗右衛門が主君の塩冶掃部介に兵学を講じていたことや、密使として近江の佐々木氏綱の元に送られたことから、彼が主君から厚い信頼を受けていたことがうかがわれる。また宗右衛門の方でも、掃部介が亡くなったと聞くと「もとより雲州は佐々木の持国にて。塩冶は守護代なれば。三沢三刀屋を助けて。経久を亡ぼし給へ」と氏綱に直訴したり、それが聞き入れられなければ「己が身ひとつを竊みて国に還る」ことを決めたりするなど、主君に対する忠誠な態度が語られる^{ix}。

宗右衛門の場合、忠誠心は主君だけに向けられているのではない。彼は見ず知らずの自分を看病してくれる左門に対し、「愛憐の厚きに涙を流して」、「死すとも御心に報ひたてまつらん」と言ったり^x、「身にあまりたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必報ひたてまつらん」と言ったりしている^{xi}。これらの宗右衛門の言葉は後の展開の伏線であるが、左門との関係に引き寄せると宗右衛門が左門に対して深い恩義を感じていることを示すものである。左門に対する恩義は、その後の宗右衛門の行動を決定する規範として作用しているように思われる。

三. 「守られた約束」——「勇気と友情」の物語

ハーンの「守られた約束」は大筋で原話の展開を踏襲しており、原話との間にあらずじ上の大きな違いはない。ただし、再話が原話よりも大幅に短い物語になっていることは注目に値する^{xii}。ここでは、ハーンがどのように原話を書き換えたのか、三つの場面を取り上げて検討する。

最初に取り上げるのは、左門と宗右衛門が約束を交わす場面である。まず、原話から引用する。

赤穴母子にむかひて。吾近江を遁来りしも。雲州の動静を見んためなれば。一たび下向てやかて帰来り。菽水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へといふ。左門いふ。さあらは兄長いつの時にか帰給ふへき。赤穴いふ。月日は逝やすし。おそくとも此秋は過ぎじ。左門云。秋はいつの日を定て待べきや。ねがふは約し給へ。赤穴云。重陽の佳節をもて帰来る日とすべし。左門いふ。兄長必此日をあやまり給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待たてまつらんと。互に情をつくして赤穴は西に帰りけり。^{xiii}

故郷の様子を確認したら帰ってくるという宗右衛門に対し、左門はいつ帰ってくるのか、日にちを定めてほしいと食い下がる。結局、確たる理由もないまま、宗右衛門は9月9日に帰ることを約束して出発する。この約束について、宗右衛門が「左門の激情に引きずり込まれた結果」であるという指摘がある^{xiv}。確かにこの場面だけ見れば左門の性急さが際立ち、それに押し切られる形で宗右衛門が左門の頼みに応じたというように読める。しかし、そうであるならば、なぜ宗右衛門は左門の頼みを断ることができなかったのだろうか。滞在先の近江から身一つで逃れてくるほどの行動力の持主が、な

ぜ求められるままに約束を交わしてしまったのだろうか。それは、彼が左門に対して恩義を感じていたためではないかと思われる。二人の間には、旅先で病に倒れた宗右衛門を左門が看病し、回復した後は義兄弟の契りを結んで宗右衛門を左門の家族の一員に加えたという経緯がある。宗右衛門は左門の親切に十分報いていないという思いから、義弟である彼との約束に応じてしまったのではないだろうか。

一方、再話では約束の場面は次のように描かれる。ハーンは原話にあった左門の生活環境、宗右衛門との出会いの経緯などの情報を一切省略し、この場面から再話を始める。

“I shall return in the early autumn,” said Akana Soëmon several hundred years ago, —when bidding good-bye to his brother by adoption, young Hasëbé Samon. The time was spring; and the place was the village of Kato in the province of Harima. Akana was an Izumo samurai; he wanted to visit his birthplace.

Hasebe said:

“Your Izumo—the Country of the Eight-Cloud Rising—is very distant. Perhaps it will therefore be difficult for you to promise to return here upon any particular day. But, if we were to know the exact day, we should feel happier. We could then prepare a feast of welcome and we could watch at the gateway for your coming.”^{xv}

再話でも、約束は左門から切り出される。しかし、ここには原話のような切迫感はなく、むしろ加古と出雲の間の距離を考慮して、遠慮がちに約束を切り出す左門の姿が描かれている。また、再話には宗右衛門が武士であることは書かれているが、左門の職業や身分など社会とのかかわりを示す情報や、宗右衛門と義理の兄弟になった経緯などへの言及はない。約束はただ二人と未来をつなぐものとして提示され、過去のとのつながりは断たれているといえる。

この違いを通して、信頼関係の捉え方をめぐる秋成とハーンの違いが見えてくる。秋成は当事者の過去や、関係が深まっていく過程の中で信義を捉えようとする。ここでは、信義は相手に対する誠実さばかりでなく、過去によっても左右されるのである。これに対し、ハーンは信頼関係と過去の事情を切り離し、約束そのものに焦点を当てる。そして、約束を左門と宗右衛門が築いてきた関係の蓄積の中で捉えるのではなく、それぞれの個人がどのようにして約束と関わるかという観点から作品を描こうとしているように思われる。

次に、松江から帰ってきた宗右衛門が、旅の経緯を左門に説明する場面を取り上げる。まず原話では、宗右衛門が部屋に通された後も口も利かず、酒や肴にも手を付けないなど不自然な様子であることが強調される。それを左門が訝ると、宗右衛門はようやく重い口を開く。

賢弟が信ある饗応をなどいなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ。実をもて告るなり。必しもあやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず。きたなき霊のかりに形を見えつるなり。左門大に驚きて。兄長何ゆゑにこのあやしきをかたり出給ふや。更に夢ともおぼえ侍らず。^{xvi}

ここにおいて、宗右衛門の話が自分は死者であるという告白から始まる点は重要である。にわかには信じがたい内容であるが、宗右衛門は「信」、「実」といった言葉を重ね、話が真実であり、誠意ある告白であることを左門に伝えようとする。この告白によって宗右衛門の不自然な態度の謎は解かれるが、読者は即座に次の謎に直面する。宗右衛門がなぜ、どのようにして亡くなったのかという謎である。したがって、原話において、この場面の主眼は宗右衛門が亡くなった経緯に向けられているといえる。

続いて宗右衛門の亡霊は、丹治によって監禁されたといういきさつを説明し、その間の苦悩を次のように語る。

此約にたがふものならば。賢弟吾を何ものとかせんと。ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。いにしへの人いふ。人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆくと。此ことわりを思ひ出で。みづから刃に伏。今夜陰風に乗てはる / \ 来り菊花の約に赴。この心をあはれみ給へといひをはりて泪わき出るが如し。^{xvii}

宗右衛門の義理堅い性格を考えた時、「あはれみ給へ」という言葉はあまりに重い。宗右衛門にとって、約束を守ることは左門への信頼を証明するだけではない。病床の彼を看病し、義兄弟として家族に迎えてくれた左門に対して、せめてもの感謝を示したいという思いからも、宗右衛門は約束にこだわったのではないだろうか。約束が守られなければ、宗右衛門は左門への恩を仇で返すことになり、左門から恩知らずと蔑まれるかもしれない。そのことが、宗右衛門の苦悩の内実だったのであり、彼を自害に追い込んだ一因だったのでないだろうか。ゆえに、常になく切迫した様子で宗右衛門が発した「この心をあはれみ給へ」とは、約束を守ることができなかったことへの無念、左門に対する罪悪感、そしてこの状況に対するやりきれない思いなどが混ざりあった深刻な言葉なのである。また左門にとっても、この言葉は特別な意味を持ったものと思われる。左門が丹治に対して怒りを覚えることは宗右衛門の話によって十分納得できるが、「泪わき出るが如し」という宗右衛門の様相は彼の怒りをいっそうかきたて、復讐を決意させるのに決定的な役割を果たしたと思われる。

これに対して、ハーンの再話では、宗右衛門の正体をめぐって原話との間に違いが見られる。再話

においても、宗右衛門は口をきかず、食事にも手をつけないが、宗右衛門の様子を左門が不思議に思ったり、ことさら不自然さが示唆されたりするような表現が見られないことは再話の特徴である。加えて、宗右衛門の生死が直接には明かされないことも原話と再話で異なる。再話では、宗右衛門は“Now I must tell you how it happened that I came thus late.”と言って旅の経緯を語りだすが、直接には自分の生死に言及しない^{xviii}。

宗右衛門の話が緊張感を帯びてくるのは、後半になってからである。彼は松江で監禁されたことを話し、今日まで囚われの身だったと言う。

[“]After I left his [Tsunéhisá’s] presence he ordered my cousin to detain me—to keep me confined within the house. I protested that I had promised to return to Harima upon the ninth day of the ninth month; but I was refused permission to go. I then hoped to escape from the castle at night; but I was constantly watched; and until today I could find no way to fulfil my promise....”

“Until to-day!” exclaimed Hasébé in bewilderment; —“the castle is more than a hundred ri from here!”^{xix}

加古と出雲が遠く離れていることや、厳しい旅路であることは原話でも触れられているが、再話は原話以上にこの情報を強調し、繰り返し言及してきた^{xx}。それが、ここでにわかには不気味な意味を帯びてくる。加古と出雲は百里以上も離れており、片道だけでも数日かかる道程である。しかし、宗右衛門は今朝まで松江の赤穴丹治の家をいたという。「今日まで！ [中略] 城はここから百里以上も離れているというのに！」という左門の言葉は宗右衛門の話の矛盾点を浮き彫りにし、改めて宗右衛門の存在を不気味な者として提示する効果がある。だが狼狽する左門とは対照的に、宗右衛門は落ち着いた調子で話し続ける。

“Yes,” returned Akana; “and no living man can travel on foot a hundred ri in one day. But I felt that, if I did not keep my promise, you could not think well of me; I remembered the ancient proverb, ‘Tama yoku ichi nichí ni sen ri wo yuku’ (‘The soul of a man can journey a thousand ri in a day’). Fortunately I had been allowed to keep my sword;—thus only was I able to come to you.... Be good to our mother.”

With these words he stood up, and in the same instant disappeared.

Then Hasébé knew that Akana had killed himself in order to fulfill the promise.^{xxi}

再話では、明確な形で宗右衛門の生死が明かされることはない。宗右衛門は左門に向かって「魂よく一日に千里をゆく」という古い諺を思い出したことや、最後まで帯刀を許されていたと話すことで、

自害したことを示唆するにとどまる。そして、左門は宗右衛門の姿が見えなくなってから、赤穴が約束を守るために自害したことを悟るのである。

宗右衛門の話は淡々と進行し、原話のような重苦しさがなくともまた再話の特徴である。原話にあった宗右衛門の絶望感や、自害に関する具体的な表現が再話にはないことが、このような印象の違いを生んだのであろう。中でも、宗右衛門の最期の言葉の違いは大きい。すでに見たように、原話では宗右衛門は涙ながらに「この心をあはれ見給へ」と言い、無念の思いを吐露した。だが再話では、宗右衛門は最後まで冷静な様子を貫き、最後の言葉も“Be good to our mother.”という儀礼的なものであった。

続いて、左門による丹治への復讐の場面を取り上げる。秋成の原話では、翌日、左門は母に向かって次のように丁寧な挨拶をして、松江に向けて出発する。

明る日左門母を拝していふ。吾^{をさ}幼なきより身を翰墨^{かんぼく}に托^{よす}るといへども。国に忠義の聞えなく。家に孝信をつくすことあたはず。徒^{いたづら}に天地のあひだに生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義の為^{このかみあかな}に終^{おは}る。小弟けふより出雲に下り。せめては骨を蔵^{ほね}めて信^{をさ}を全^{しん}うせん。公尊^{きみおほんみ}体を保^{たち}給ふて。しばらくの暇^{いとま}を給ふべし。xxii

左門の言葉からは、彼が宗右衛門の帰還を「信義」の行為と捉えていることがわかる。そして、約束を果たすために命を断った宗右衛門の「信義」に応えるべく、左門は「せめては骨を蔵めて信を全うせん」と決断するに至る。そして寝食も忘れるほどの勢いで道中を急ぎ、十日かけて松江に着くと、まず丹治を訪ねた。そして、中国の故事を引くなどして「士たる者」の「信義」を説くと、次のように述べて丹治を非難する。

伯氏宗右衛門塩冶^{せんや よしみ}が旧交^{きうこう}を思ひて尼子^{にこ}に仕へざるは義士^{ぎし}なり。士は旧主^{きうしゆ}の塩冶^{しんじ}を捨て。尼子^{にこ}に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花^{きくか}の約^{やく}を重んじ。命を捨てて百里^{ひゃり}を来しは信^{まこと}ある極^{かぎり}なり。士は今尼子^{にこ}に媚^{こび}て骨肉^{こつにく}の人をくるしめ。此横死^{このうし}をなさしむるは友とする信^{まこと}なし。経久^{しひ}強^{つよ}てとどめ給ふとも。旧^{ひさ}しき交^{まじ}はりを思はず。私^{ひそか}に商鞅^{しやうやう}叔座^{しゆくざ}が信^{まこと}をつくすべきに。只^{えいり}栄利^{えいり}にのみ走りて士家^{しのか}の風なきは。即^{すなはち}尼子^{にこ}の家風^{かふう}なるべし。さるから兄長^{このかみ}何故^{なんご}此国^{このくに}に足をとどむべき。吾^{われ}今^{いま}信義^{しんぎ}を重んじて態々^{わざわざ}こゝに来る。汝^{なんぢ}は又不義^{ふぎ}のために汚名^{をめい}をのこせとて。いひもをはず^{ぬきうち}抜打^{きり}に斬^きつければ。一刀^{かたな}にてそこに倒^{たを}る。xxiii

左門は「信^{まこと}ある極^{かぎり}」、「友とする信^{まこと}」など「信^{まこと}」という言葉を繰り返し使いながら、丹治にはこれらの「信^{まこと}」がないと責めたてる。ここで注目したいのは、左門が「信義」の有無を正義と悪という二項対立の論理で捉えていることである。彼にとっては、丹治の「不義」を非難してこれを咎めることは、宗右衛門への「信を全う」することにつながる。さらにいえば、これは「この心あはれみ給へ」という宗右衛門の最期の言葉に対する左門なりの応答でもあった。ゆえに、左門の考え方に沿えば丹治の「不義」は十分に復讐の動機となりえる。このことはまた、左門のひとりよがりな論理ではなく、経久の理解を得られるものであった。

尼子経久此よしを伝へ聞て。兄弟信義^{しんぎ}の篤^{あつ}きをあはれみ。左門が跡^{しひ}を強^{おほ}て逐^{おは}せざるとなり。xxiv

ここにおいて、丹治を襲撃した左門の行動は「兄弟信義の篤き」こととして正当化される。経久にしてみれば、家臣が襲われたのだから左門を捕えて厳しく処罰せねばならない。だがあえて、経久は左門を見逃すことにした。それは、彼自身も武士として「信義」の重みを理解していたからであろう。

以上の場面は、ハーンの再話では次のように描かれる。

At the earliest dawn Hasébé set out for the Castle Tonda, in the province of Izumo. [...] Then Hasébé went to the house of Akana Tanji, and reproached Akana Tanji for the treachery done, and slew him in the midst of his family, and escaped without hurt. And when the Lord Tsunéhisa had heard the story, he gave commands that Hasébé should not be pursued. For, although an unscrupulous and cruel man himself, the Lord Tsunéhisa could respect the love of truth in others, and could admire the friendship and the courage of Hasébé Samon. xxv

原話に比べて、再話はずいぶん短く、内容も簡潔である。特に復讐の場面は、左門が丹治を責めて家族の目の前で斬りつけたという出来事は原話も再話も同じだが、みずからの論理を中国の故事によって正当化し、一方的に丹治を責めたてる左門の言葉や、彼の激烈な怒りを示すような原話の描写は、再話には見られない。また、左門が丹治の罪とした「不義」も再話では「裏切り」 (“treachery”) という言葉に置き換えられており、道義や倫理よりも行為そのものに注意が向けられている。さらに、経久が左門を見逃した理由も原話と再話では微妙に異なる。原話では、経久が左門と宗右衛門の「信義」が経久の胸を打ったとされるのに対し、再話では「左門の友情と勇気」として経久の心は左門にのみ向けられている。経久は他者をいつくしむ心を解する人であったゆえに、左門の「友情」にかける思いとそのための「勇気」に心打たれたとされている。

四. 約束のために命をかけるということ

「守られた約束」は大筋で原話の展開を受け継ぎながら、大胆な省略によって原話とは趣向を異にする。まず原話では、秋成はそれぞれの人物の経験や人間関係を通して「信義」を描きだそうとした。その際、左門や宗右衛門の過去を掘り下げ、人間性を細かく設定したことで、原話では特殊かつ一回的な経験として一連の出来事が提示される。

原話において、左門と宗右衛門は博士と武士として職業や身分は違うものの、どちらも社会的な立場によって自己を捉え、その規範を意識して生きてきた点は共通する。しかしこの規範意識こそが、宗右衛門を死へと追い詰めることになる。彼の死は、いわば左門に対する恩義に押しつぶされた結果ということができよう。また左門にとっても、規範意識は「信義」と結びついている。彼は丹治に復讐する際、相手の事情を考慮せず、一方的に糾弾して斬りつけるが、この時彼が引いたのが『史記』にある公叔座の故事である^{xxvi}。実生活とかけ離れ、故事の論理のみに拠って立つ左門であるが、彼の「信義」はそれによって正当化されているのである。

これに対して、ハーンの再話では登場人物の過去や約束の背景に踏み込まないことで、特殊で一回的な物語から約束をめぐる説話へと作品の性格が変更された。それに合わせて、「信義」という原話の主題も再話では書き換えられている。原話では、「信義」を支える要素として、宗右衛門の左門に対する恩義に加え、死者となった宗右衛門の絶望や無念を前景化した。一方、再話では宗右衛門の内面には触れず、主題も「信義」から「勇気と友情」へと変更された。ではなぜ、このような変更が行われたのだろうか。

それは、宗右衛門が抱く恩義が欧米の人びとの目には独特の感覚として映ることがあったためかもしれない。ルース・ベネディクトは、『菊と刀』の中で「恩」とは、「人ができるだけ力を出して背負う負担、責務、負荷である」と定義し、アメリカで「義務の拘束を受けることなく自由に与えられるもの」とされる「愛」と比較する^{xxvii}。彼女はまた、「「義理」にどうしても従わなければならないのは、世間の取沙汰が恐ろしいからである」とも述べている^{xxviii}。これに従えば、義理や恩義を義務と捉える原話の宗右衛門の感覚は、確かに欧米の読者の共感を得づらいのかもしれない。このような理由から、ハーンは義理や人情に支えられる「信義」ではなく、「友情と勇気」の物語として「守られた約束」を書いたのではないだろうか。

左門と宗右衛門が知り合った経緯を省いたのは、左門の親切がかえって宗右衛門の負担になるとハーンには思えたのかもしれない。宗右衛門の意思だったとはいえ、彼が自害を決めた根底には左門への恩に報わなければならないという義務感があったのではないだろうか。ハーンが原話に読み取ったのは、「信義」の美談ではなく、死後も解決されない宗右衛門の無念だったのかもしれない。そしてそれ以上に彼の注意を引いたのが、命がけて約束を守るという出来事だったように思われる。彼が「守

られた約束」に書いたのは、約束の程度に関わらず、そのために死を選ぶ人々がいるということであり、それに対する驚きだったのではないだろうか。

-
- i ハーンの妻であった小泉セツ（節子）は、後年、「幽霊滝の伝説」や「耳なし芳一」をハーンに語りかかせた時のことを次のように述懐している。「私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考でなければ、いけません」と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。」（小泉節子・小泉一雄『小泉八雲 思い出の記 父「八雲」を憶う』、恒文社、1976年、22頁。）
- ii 井上泰至『上田秋成の怪異の正体 雨月物語の世界』（角川学芸出版、2009年）、7頁。
- iii 高田衛「作品解説」（中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳『英草子 西山物語 雨月物語 春雨物語』、日本古典文学全集48、小学館、1973年、49頁）
- iv 田代三千穂「ラフカディオ・ハーンの怪奇物語（Ⅱ）——“Of a Promise Kept”について——」（『鶴見女子大学紀要』第7号、1969年12月）、17頁。
- v 宮嶋夏樹「小泉八雲と上田秋成——雨月の二作品をめぐって」（『明治大学和泉校舎研究室紀要』第18号、1961年）、28頁。
- vi これは『雨月物語』研究においても共有される問題意識である。例えば、中田妙葉は次のように述べて、趣向の新しさに注目するあまり作品の全体に意識が行き届かない研究態度に警鐘を鳴らす。「部分的な趣向の新規にのみ意が向けられることは、主題との緊密な調和への考慮がおろそかになり、主題の一貫性が保たれなくなる「趣向倒れ」という破綻をもたらす。それでも読本作家の評価は、ほとんどが趣向の運用の巧拙如何によって定められ、作家の技量を定める基準となっていたのである。しかしこのことは、読本作家の技量と認識は、先行作品に学ぶ場合でも、趣向または措辞といった第二義的なものの継承に止まり、第一義的な主題理法を継承するという、高度の摂取には及ばなかったことを示すに他ならない。」（中田妙葉「「菊花の約」における「信義」について——中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察——」、『高崎経済大学論集』第48巻第4号、2006年、128頁。）
- vii 上田秋成全集編集委員会編『上田秋成全集』第7巻（中央公論社、1990年）、236頁。ルビは原文による。以下、「菊花の約」は同書から引用する。書名は『秋成全集』と略記し、巻数とページ数を記す。
- viii 同書、237頁。
- ix 『秋成全集』第7巻、238頁。
- x 同書、237頁。
- xi 同書、238頁。
- xii ハーンの話は、原話に対して7割程度の分量であるという試算がある（森亮『小泉八雲の文学』、恒文社、1980年、38頁）。
- xiii 『秋成全集』第7巻、239頁。
- xiv 木越治『秋成論』（ペリかん社、1995年）、334頁。
- xv Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. 10 (Kyoto: Rinsen Books, 1973), 193. 以下、ハーンの

文章の引用は同作品集による。書名は *WLH* と略記し、巻数とページ数を記す。

xvi 『秋成全集』第7巻、241頁。

xvii 同書、242頁。

xviii *WLH*, vol. 10, 196.

xix *Ibid.*, 196.

xx 先に引いた約束の場面のほか、約束の当日、宗右衛門を待ちつづける左門に母が言う“The province of Izumo, my son, is more than one hundred ri from this place; and the journey thence over the mountains is difficult and weary[.]” (*Ibid.*, 194)という言葉においても、加古と出雲が遠く離れていることは言及されている。

xxi *Ibid.*, 197-198.

xxii 『秋成全集』第7巻、244頁。

xxiii 同書、245頁。

xxiv 同書、245頁。

xxv *WLH*, vol.10, 198.

xxvi 中村幸彦ほか校注・訳『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』、357頁、頭注。

xxvii ルース・ベネディクト、長谷川松治訳『菊と刀』（社会思想社、1967年）、115頁。

xxviii 同書、164頁。